

たかやまうこん
ユスト高山右近から学びましょう。



今月(2月)7日(金)大阪でユスト高山右近が列福されることを皆さんもご存知のことと思います。—

*私事で恐縮ですが、私は初めてユスト高山右近に出会ったのは10歳の時だったと記憶しています。教会学校に通っていた私は、毎週、少年のための雑誌(日本の「こじか」のようなもの)を教会でもらっていました。その雑誌の中に数ページにわたる漫画が載っていました。その漫画は主に、教会の聖人の生涯を紹介していました。そのおかげで子どもの頃から長崎の26聖人やユスト高山右近のことを知ることができました。当時、高山右近はまだ列福もされていなかったのに、どうして少年向けの雑誌に紹介されたのかがよく分かりませんが、その漫画を読んで、自分が強い印象、忘れることのできない印象—を受けたことをよく覚えています。

キリスト教についてもなおさら、日本の武士道についても何も知らなかったにも拘わらず、子どもなりに、ユスト高山右近のうちにキリスト教と武士道は見事に融合し、調和しているとおぼろげに感じ、自分にとって彼は憧れの的になりました。景色、建築物、衣装など、その漫画が描いていたことはすべて新鮮で珍しく、その絵

は長い間心に焼きついて離れませんでした。遠くて、おとぎ話のような国、日本に魅了されました。物語も少年の私の想像力を掻き立てさせた話だったことをよく覚えています。さらに、同じキリスト者であるユスト高山右近を誇りに思ったことも忘れていません。

＝その頃、まさかある日自分が司祭になって、日本へ宣教師として派遣されるとは、まったく想像もつかないことでした。

*ところが、日本に来て小教区に赴任するとびっくり仰天。当時(50年近く前のことですが)教会の子どもたちは高山右近について何も知りませんでした。多くの大人も右近について学校の教科書に載っていたこと以外にほとんど何も知りませんでした。—

なんと残念なことかと思い、その時以来日本語で出版されてきた本を読み続け、得てきた知識を子どもたちを中心に伝えるように心がけました。

＝特に堅信の秘跡に向かって準備していた少年少女たちに必ずユスト高山右近を紹介し、彼に対して誇りを持ち、彼から学び、彼に倣って勇気をもって主イエス・キリストを信じる者として生きようと呼びかけ続けました。2015年11月22日、行橋小教区で堅信の秘跡を受けた少年少女

たち一人ひとりに、小教区も2014年に出版された古巣馨神父の「ユスト高山右近—いま降りていく人へ」という本をプレゼントしました。



*この紙面を借りて大人の皆さんにも呼びかけたいと思います。「過去において、キリスト者として模範であるユスト高山右近を記念する教会だけでなく、彼に倣って主イエス・キリストと福音に生き、証しする教会になるように本気で行動を起こそう」と一。



2008年11月24日長崎でペトロ・カスイ岐部と187名の殉教者の列福式が行われたことを皆さんもまだ覚えておられることと思います（祝日は7月1日）。— その時以来私たちの信仰生活において何が変わったのでしょうか。

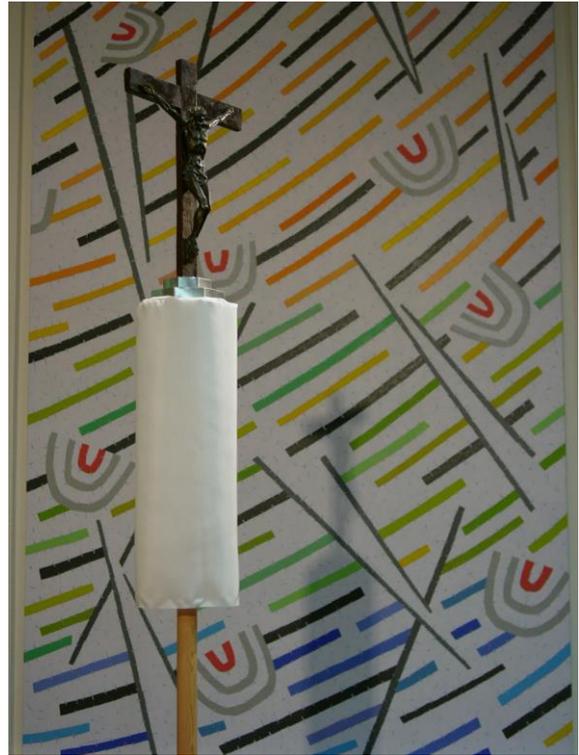
信じているはずの主イエス・キリストへの自分の証しはどう変わったのでしょうか。

その問いかけに正直に答えようとしなければ、ユスト高山右近の列福式は単に過去の英雄を称える「イベント」で終わり、この式は意味がほとんどないといっても過言ではないでしょう。—

＝私たちが生活している場で、それぞれの立場においてユスト高山右近に倣って主イエス・キリストに生き、イエスの福音を証しするように励み、そのために具体的な形で行動を起こすように心がければ、初めて、ユスト高山右近の列福に対して喜びを抱き、その列福を心から祝うことには意味があると思います。

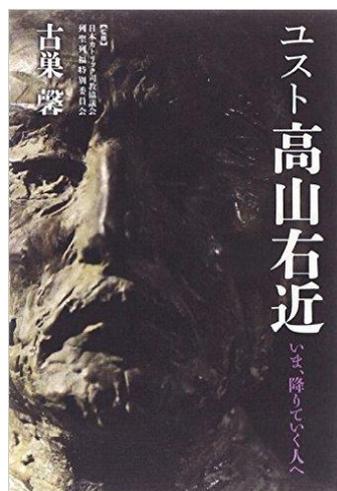
*現在の日本の社会の中で自分は主イエス・キリストとイエスの福音をどのようにして、どれほど宣べ伝え、証ししようとしているか。—

- まず、その「使命」を、イエスから^{ゆだ}委ねられたことを、新たに自覚するように心がけましょう。
- そして、その「使命」を果たす責任が自分にあることを、もう一度しっかりと意識しましょう。
- 最後に、そのために求められている努力を^{おこた}怠らず、行動を起こすように励んでみましょう。



—主イエス・キリストの導き、支えと力を絶えず祈り求めながら—

—そうすれば、ユスト高山右近から学び、21世紀のイエスの弟子に^{ふさわ}相応しく生きることができるようになるでしょう。



＝是非、古巢馨神父の本を読むようにお勧め致します。